Refections ou sentences et maximes morales


[Note: This is a citation for a work by La Rochefoucauld, known for his moral reflections and maxims.]
クルタンは自著の序書に、「トリシュの新版を「すぐれた校訂本」（la belle édition critique）と高く評価し紹介し、両者は互いに知らぬままに仕事をしてきたが、しばしば同じ結論に達した」と付記している。

注（1）一九五七年にクラシック・ガルニエ叢書版として、ラ・ロシュフォール「箴言集」が出版されているが、これはヴォーヴァルデ著作業の合本である。一冊の中で後者の比重の方が大きく、ラ・ロシュフォールの「箴言集」は、むしろお添えものである。

ラ・ロシュフォール「箴言集」（一六三三～一八八四）は生前に「箴言集」を五回刊行している。一六八八年に初版（箴言数三三一）つづいて一七一年に第三版（箴言数三四四）、一七六年に第四版（箴言数三四四）、一七七年に第五版（箴言数五〇四）である。

なお、初版出版の前々年に当る一六三三年に、すでに数種の写本が出回り、前年の一六四四年にはオランダで海賊版が出ている。ラ・ロシュフォールは写本の段階でも、各版においても、常に新たに箴言を追加し、代わりに幾つかの箴言は削除し、こうして著者の死の前々年に当る一六七八年の第五版が著者自身の目を通した最終版として残り、死後出版されたいすれの版も全てこの決定版を底本として編纂されていることとなった。
ラ・ロシュフコール『箴言集』の成立と発展

三〇〇〇年次の実現を迎えるに至るまで、最も権威ある校訂本はジルベル編のフランス大作家集書版（Oeuvres de La Rochefoucauld, Tome I, par M. D. L. Gilbert, Les grands écrivains de la France, Hachette, 1868）である。

これは一六七六年の決定版を底本に、著者の死後発見された箴言、および、決定版に削除された箴言も全て網羅し、各版の異同から原典の調査に至るまで、当時としては精緻を極め、詳細な伝記と同時代人の批評も付加した、極めて浩瀚な版であった。以後の各版は全てこれを範として編纂されていった。

しかし、この校訂版は作者の時代的な欠陥を内蔵していたのである。それは編者のジルベルが一八六八年当時の『箴言集』写本の多様性に気づいていなかったことから起きた。トリュシェの調査によれば、『箴言集』の写本は現在十二種類が見られたされている。原物が残っているものの八種類、散逸してしまったが写真版などがお蔵で現物と同様のとして信頼しこえるものが四種類である。

ジルベルはラ・ロシュフコール家から借り出した写本（ジルベルの名前の言によれば、ラ・ロシュフコール自筆に基づいた木版）が、そのほかにこんなにも多種多様の異写本書が存在していたことは懸念をもたらした。彼の版が出るより五年前、一八六三年にバルテルミ（Barthélemy）が、やはりラ・ロシュフコール家から借りた別

さらに、一八七九年になるとベルギーの学者Willemsが、『箴言集』初版の前年オランダにおいてすでに海賊版
までたっても実物が発見されないので、ジルベルトをはじめ誰しもその存在を疑うに至っていたのである。

ジルベルトはこれらを知らぬままに死んでしまったが、大作家書籍の編集長レネ・レシュピエはその次階に気づき、写本の探査にとりかかったところ、驚くべきことには、前記のパルテルミ写本ともジルベルト写本とも異なる第十三の写本を発見した。これが発見された城館の名にちなんでリアンクール（Liancourt）写本（大部分ラ・ロシュフォール＝ライフ）、補遺一八ページ）である。なぜに浩瀚で精緻な校訂本だが、二分冊になったが故に、当然のことながら極めて読みづらい。

おそらく百年後、三十年祭に契機に出てトゥジュの新ガルニエ版は、その後の研究に彼自身の調査を付加した新書を持ちと共に、あわせて大作家書籍の詮にくさを鮮かに解消した画期的名著である。首部は一九七八年の決定版を底本にして、『箋言集』の初版を復元したのをはじめ、箋言集の原型であるリアンクール手稿本や、一九六三年の写本、さらにはまた、箋言集の発展段階における原点であると考えるため、また『箋言集』ととりわけろうに成功した。
ラ・ロシュフコー「箴言集」の成立と発展

さらに、巻末には「箴言集」成立にかかわる著者の手紙、読者の反応、同時代人の批評（新資料として）を置きつづけられている。

このようにトリュシェ版は、たとえそれが発展途上の時においても、常にある「箴言集」を一冊の集として捉え、「箴言集」総体の成長史を中心にしてているのに対し、ドッフェフェのスケルトン版は個々の箴言一一つの添削と修正の跡をたどることを核にして編纂されている。

編者は箴言の配列順序や番号などは一六七七年の決定版に従いながら、まるで决定版の箴言を提示したあと、一一つの箴言それぞれについて詳細、綿密なヴァリアントを付している。

だからトリュシェ版が個々の箴言の微細な表現技法の変化に至るまで微視的に観察することができる。何か一ひらかな添削を受けてきたか、いったいいかなる箇所を受けてきたか、その生成と発展の跡をたどってみたい。

ラ・ロシュフコーは、もし健康が許せば、第五版のあと、さらに第六版、第七版と改訂版を出し続けたであろう。
「篠音集」初版出版の前々年に当る一六三三年、当時のサロンに数多く出回った写本とそのコピー群の歴史については、まだ不分明、未解決な点も多いが、リンクルール写本を「篠音集」の原形と考えるのでは定説となりつつある。今世紀半ば頃まで、オランダ版原本が最も古い「篠音集」ではないか、との説もある。それは一六六六年ラファエリ（Marquise de Sable, 1599-1675）宛へおよびジャック・エスピリ（Jacques Espirit, 1611-1678）宛書簡とリンクルール写本との間に極めて密接な照応関係があることを指摘し、リンクルール写本こそ「篠音集」の基本台帳であると推定した。スクランブルも前記新版の序文にこのラファエリ説を肯定的に紹介し、オランダ版原本はその内容からみて書かれた時期はリンクルール写本と一六五年初版との間の関係を考えざるを得ない。なお十七世紀フランス文学史1の中でもアントワーヌ・アダムも、後者の論文に好意的にふれ、オランダ版が最古の原形である。
ラ・ロシュフコー「箴言集」の成立と発展

1. 自己愛についての長い論述（箴言番号G. E. F. 五六三、L. 九四、H. 一〇五）について、リアンクール版のと

の論述は、一六五九年十二月十三日、Charles de Sercy
編によって刊行された『Recueil de pièces en prose,
les plus agréables de ce temps, composées par divers auteurs』に照応する。一方、オランダ版のものは、リ

アンクール版のそれに一六三年の写本の箴言二つ（〇〇番、〇〇番）がプラスされたものである。両

の論述は、一六五九年十二月十三日、Charles de Sercy
編によって刊行された『Recueil de pièces en prose,
les plus agréables de ce temps, composées par divers auteurs』に照応する。一方、オランダ版のものは、リ

アンクール版のそれに一六三年の写本の箴言を添付したものです。しかし、この箴言がリアンクール写本の九四番目に存在するという事は、取りも直さず、この時期（一六五九年末）

了め、サブレ夫人やジャック・エスプリと相談がすむと、ただちにこれに登録していったらしい、とされている。
les viscès entrent dans la composition des verres. Comme les poisons contient dans la composition

un élément contenu dans le man de la vie, (182)

des plus grands remèdes de la médecine. La prudence les assemble, elle les tempère et elle les

conduits le moment où le corps et la santé...

(182) 

et par exemple, il est vrai que dans un livre ancien, il est dit que les viscès sont le moyen le plus ef

ficient de guérir les maladies.

(182) 

Ce livre ancien, il est vrai que dans un livre ancien, il est dit que les viscès sont le moyen le plus ef

ficient de guérir les maladies.
さわしい。著者は、冒頭にこの箇所を置くことによって、自らの人間観と分析の手法を説明したものを理解すべきで
ある。ところが、リュシェは最もあり得べきこととして次のように推論を進める。一六八三年のコピーはリャンクール写本が
二〇四番までの箇所を持っていた時になかったのでであろう。そこで一九九番から二〇七番までの箇所では、それぞれが二〇七番と二〇九番の箇所を行われたのである。

つまり、リャンクール写本は元表を考えていない単なる合帳であったけれども、一六八三年のコピー群はサブレ夫人を媒介者として、広い範囲の人々に読んでもらい、批評を乞うために作製されたものであり、当然作品を初めて世に出すに際しての改良や仕上げが行われたと考えられる。これらの中に見られるテキスト改良や修正は非常によく似ているし、両者は共通の原形に基づくと考えられる。

さらに、コピー群ともに
の箇所を読者は初めに見れないにせよ、
そこである種の選択と分類整理が働いたことを示している。
无法识别文档内容。
ラ・ロシュフォール『箴言集』の成立と発展

だが、これを原形として多くのコピー群が出来、サプレ夫人は多くの人にこれを送って批評を求めた。そのうちの一つが一六三年末か六四年初めにオランダに渡り、出版されるに至ったのである。これらはそのどこまでラ・ロシュフォールの存在を熟知しており、その世評をふまえて修正し、加筆し、一六五年ついに初版刊行にふみ切ったのである。

ラ・ロシュフォールは一六四三年に印刷された可能性がある。なぜなら、初版の発行年は一六五年だが、これも前年の一六四年一〇月に印刷されている。

注（1）ラ・ロシュフォールは一六四四年二月四日付の手紙で、早くもオランダ版に言及しており、この版の発行年は一六四年である。

注（2）“le qu'on appelle de nos jours un sondage d'opinion”（ibid., P.XXX）
コートルツラブ夫人が『箴言集』出版の可否をうかがう打上げた観測用ラジオ・ゾンデであり、水深調査のための測
量船であった。一六六三年当時のラ・ロシュフコートルツは、自分が文芸の書を出すということは、まだまだ思いもよらぬ、勇気
の要る、大した仕事であったに違いない。それは十年前の自分からは全く想像もつかずな事態であった。その年（一
六五三年、彼はまた反王権、反宮廷の絶望的な戦いから脱出ししたばかりであった。顔面に銃弾を受け、敗残の身
を故郷に蟻居しながら養い、『回想録』（一六六三年刊）を書きはじめたばかりであった。
画家ゴーギャンの転身にも似て、ラ・ロシュフコートルツは前半生、その後半生を予見せしめるもののは皆無である。
しかし、どれ程足繁くそのサロンに通ったかは定かではないが、あまりにも隔たる彼の前半生と後半生をつなぐ唯一の
絆として、一六四〇年代末から一六六〇年代初めにかけて、彼女との親しい交遊を重く考えて歩き得る。
ラ・ロシュフコートルツ公爵の家系は、遠く十一世紀の初め、アンモア州la Rocheの領主Foucauld一世にまで遡
る。『箴言集』の著者François・六世はその二十一代目の当主であり、その家系は代々フランス王家から王族として
選ばれた。祖先の一人は名君フランソワ一世の名付け親であったし、父はルイ十三世の重臣の一人、叔父は枢機卿であ
った。フランス文学史上最大の貴族に生れ（二六〇三年）ながら、青年ラ・ロシュフコートルツは歴史の流れに逆って、反王権
反バザランの陰謀に加担し、反中央集権の最後の戦い——フロンドの乱（一六四八—五〇年）にとも参加、傷つき
敗れ。居城は破壊され、数年間の追放処分の後、赦されてパリに戻り（一六五六年）、国王から年金を受ける身とな
ラ・ロシュフォール『築言集』の成立と発展

この頃、ルイ十四世とマザランの対立が絶対主義体制はほぼ完全に整い、独立不羈の誇り高かったラ・ロシュフォール公爵も、今は反逆の前半生に終止符を打ち、矢意と屈辱の思いにまみれながら、武人貴族としての文人貴族にとって、サプレ夫人のサロンはしばしば屈辱の思いを忘れ、自己を傷ることなく文人への自己改造を为し得る唯一の心安まる場所であった。

ランブイエ侯爵夫人（Marquise de Rambouillet, 1588-1665）のサロンをはじめ、十七世紀の貴族社交界はそのほとんどが反宮廷的、反対主義的性質を帯びていたが、なかでもサプレ夫人のサロンは最も尖鋭に宮廷と対立する世界であった。彼女の夫も、反リシュリューの政権マリー・ド・メディシスの一派で、摂政の失脚後失意の生涯を送ったが、その頭目コンデ公、および、妹のロングヴィル夫人（ラ・ロシュフォールの恋人）の間に、彼との間に一子をもうけた。

さらに、サプレ夫人はジャンセニスたちと極めて密接な関係にあった。彼女の居宅はジャンセニスたちの拠点、ポール・ロワイヤル僧院の庭と地づくしの所に構えられ、そこには大アールノーなど、ボーモ・ロワイアルの学者も高等法院の法服貴族たちがしばしば訪れる所であった。そこではフロンドの乱後、なおルイ十四世やマザランなどに抵抗の姿勢を保つ人たちの根拠であったが、ジャンセニスの教育にもとづく厳しい人間性論議が展開されていた。

ラ・ロシュフォール夫人のサロンは、反宮廷の気風では一致しても、さらに哲学的、倫理的な傾向を強めていったと言えるであろう。
六年か六三年のラ・ロシユフコー発のサブレ夫人宛の手紙（Conclusion）には、新作の篳篥を書き送ったあと、「ただ働きはいるでだから」とおっしゃってから、人のポタージュや羊肉のチーズなど、料理の名をまとうてあげて御馳走を注文し、さらに、この前菜でそこねたチーズ二皿を今度は是非と所望したりしている。遠慮せずの素直な交雑ぶりがうかがわれる。

サブレ夫人はラ・ロシユフコーに「篳篥づくりの病気をうつされた」と元談を言い、
ラ・ロシユフコーはエスプ
リに「あなたのおせいで篳篥にのめり込み、私の休息が乱された」と嘆いてみせている。

一人がアイディアを出し、他の一人がこれを見篳篥にまとめる。また、一人が篳篥を作り、別の一人がこれを添作し
て仕上げる。このような共同作業がある時期行われたことは確実である。

一六六三年のサブレ夫人発ラ・ロシユフコール手紙に、「ただ今、良い篳篥を読みました。私のものが、あんな
上手にいかなかったのですので、つい私が書いたのではいかいかなのか判解したくなります。急務の産物が、あな
たの才気、あなたの感覚を通じて表現される（例えば、二四、二六、七〇、一三九、一八五、一九九、二三三など）。これらは明らかに三人
間で共同製作がなされた名残りである。

トリュシェの研究によれば、サブレ夫人とジャック・エスプリの篳篥観に、「ラ・ロシユフコーと部分的に全く同じ
篳篥が見出される」（例えば、二四、二六二、七〇、一三九、一八五、一九九、二三三など）。これらは明らかに三人の
一六六年頃になると、篳篥づくりのリーダーはすでにラ・ロシユフコーに移っていたらしい。文面ののはしばしば
19 ショッピング

山根と遊歩

1978年9月5日

（記録）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（註）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものである。

（注）

この書物は、山根の研究に際して行われたものであり、その内容は山根が自身の観察を基にしたものです。
ラ・ロシュフコーはまだこの時期、自分一人だけの『箴言集』を公刊することには、ためらい、たじらぎ、迷い続けている。彼は一六九九年、自らのポルトレに「私は才知を有する。」という一貫した自負を示し続けていた。それ故、もしこの方向の栄光に敏感ならば、ちょっと努力しなければならぬだろう。しかし、すぐその先で「私は、詩や散文の著作を見せるとき、かなりの評価を得る」と思う。それから文筆の才に自信を示してはいた。

「何事につけラ・ロシュフコー氏には何かわけのわからないものがついて回った。」という有名な書き出しで始まる『不決断の結果は明らかだ』（Une irresolution habituelle）がいつ回った。「われわれには原因は分からないのだが、その習性となった不決断、不確定さが」（Retz）枢機卿のラ・ロシュフコー公のポルトレ（「六七三年」）には、「彼（ラ・ロシュフコー）にはいつも不決断の結果が明らかだ。」「私生活に見られるあの恥じらいと脂病の様子」など、ラ・ロシュフコーの優柔不断な性格が活写されている。

また、後年（一六七九年）、ラ・ロシュフコーをアカデミーに立候補しなかったのは、脂病と、公衆の面前で話すことへの恐怖感があったのだろう。
一方の極に自信と自負があり、もう一方の極に不安と恐怖がひそんでいた。ラ・ロシュフコーは自作の篤言についてでサプレ夫人やエスプルからはすでに充分な共感と賞賛を得ていた。しかし、一方、そのあまりに厳しい人間性批判と新鮮な美徳攻撃に反撃し、敵対するプレシェーズたちも多かった。

後年、サプレ夫人に同じラ・ロシュフコーと親交を結び、彼の影響下に名作『クレーヴの奥方』（一七八年）を書くラ・ファイエト夫人（Mme de La Fayette, 1634-93）も、一六三年当、サプレ夫人にまだ次のように書き送っていた。

『ラ・ロシュフコー様の篤言をお読みしました。ああ、このもの、このようなことを思い描けるとは、何と諦心に何というあたたかい反撃、尊敬、排斥のほか、最も辛辣なものは大要、次のようにラ・ロシュフコーの著作の存在理由を否定していた。

この年、サプレ夫人に寄せられた手紙には厳しい批評も多かった。ラ・ファイエト夫人に代表されるような生理的反撃、嫌悪、排斥のほか、最も辛辣なものは大要、次のようにラ・ロシュフコーの著作の存在理由を否定していた。

しかし、無神論者たちの手に渡ろうものならば、彼らを誤りの中に閉じ込める、この世に美徳はないと信じさせ、怠惰の中において一人立ちできない。もし、
ラ・ロシュフコール「箴言集」の成立と発展

注 (1) "J'ai de l'esprit..." "J'écris bien en prose, je fais bien en vers, et si j'étais sensible à la gloire qui vient de ce côté-là, je pense qu'avec du travail je pourrais acquérir assez de réputation." "Portait du Duque de La Rochefoucauld par le Cardinal de Retz" C'est qu'il y en a encore de mal en moi, c'est que j'ai quelquefois une délicatesse trop scrupuleuse,..." "Lui, qui craint d'être ridicule plus que toutes choses du monde":"Ed. de Truchet", P. 571, Lettre 31, (英語)

注 (2) "Portrait du Duque de La Rochefoucauld par le Cardinal de Retz"

注 (3) "Notice Biographique de La Rochefoucauld", "Ed. G. E. P" Tome I, P. XC-XCI.

注 (4) "Ed. de Truchet", P. 571, Lettre 31, (英語)

注 (5) "Portrait du Duque de La Rochefoucauld par le Cardinal de Retz"

注 (6) "Notice Biographique de La Rochefoucauld", "Ed. G. E. P" Tome I, P. XC-XCI.

注 (7) "Portrait du Duque de La Rochefoucauld par le Cardinal de Retz"

注 (8) "Lui, qui craint d'être ridicule plus que toutes choses du monde": "Ed. de Truchet", P. X VI.

注 (9) "la (= maxime) publier n'aurait pas été d'un honnête homme": "Ed. de Truchet", P. X VI.

一六六三年を中心とする一両年間はラ・ロシュフコールにとって、箴言創作の喜びと『箴言集』発表の不安と期待が交錯する年月であった。自己の才能にたくさんのところはあったが、世間の承認に確信を持てなかった。
ラ・ロシュフォールはサブレ夫人に讃言を送り続け、サブレ夫人は交際の広さを利用して、多くの教養人に讃言
集のコピーを見せ、批評を求めて、ラ・ロシュフォールに回送してもらった。

中には、聖職者からの極めて好意的な批評もあった。

お送りいただいた著作は、一見全く有害なもののように思われますし、高慢で、皮肉で、横柄な人の書いたもののが見出されますが、これは古来の哲学者も近代の学者先生も知らない方法で、われわれのうちはあってしばしば美徳に変貌する情念の本質を解明した立派な道德書なのですから、それは、人間の知恵の弱さ、理性やいわゆる精神力の弱さの見出ものです。それは、事実と自己愛と自尊心にある人間の腐敗、さらには、神の心を持たず、自分自身のことにかまわず、自然の光と理性にもとづいてのみ行動する時、もっとも正直の人でもいかに舞うかの見事な描写です。それは、人間が恩恵を手に入れた雪を、溶かさなければおかな太陽です。それは、強く願う者のあらゆる美德は悪徳なりとする聖アグスチヌスの書の立派な注釈です。それは、独力で克ち得了道徳的美德などという張り子の岩を掘り返せば発見の喜びを与えくれます。率直に言って、それは逆説に満ちていますが、この逆説はなかなか当
を得たものです。ここには、私の支持しないものは何もありません。それどころか、聖職者の選挙と完全に一致するものも多数あります。

筆者は特定できないものの、手記の冒頭に十字を書かせてくれ、聖職者の手紙であることは確実で、いささかキリス
ト教徒の手紙に近づけすぎた感はまぬかれないものの、当時としては、ラ・ロシュフコーの手紙を送ってラ・ロシュフコーへと回送されてきたものです。ラ・ロシュフコーは、教義を棄て、愛するさまざまな意見に耳を傾けながら、篩言の創作、加筆、修正に余念がないかのように見えた一六三三年末か、あるいは、一四六年、突如、オランダで、これらコピー群の一つを底本とし
て、ラ・ロシュフコーの『篩言集』が匿名のまま出版されてしまった。

このオランダ版の改訂者Jean Marchandの記述によれば、古く一六三三年オランダ版を再版し、Alphonse Pauthyが
イアッド版の改訂を出版して、ラ・ロシュフコーを含む篩言の全集が匿名のまま出版されてしまった。さらに、その序文において、オランダ版をラ・ロシュフコー自身の指示によって出版されたのではないか、との疑いを払推出的気球ではなかったか、とする説である。

これに対して、早くも一八四四年、Granges de Surgères侯爵が反論し、オランダ版と初版はほとんど間隔を
置かずに出版されており、前著者が後著者のために観測気球の役目を果したとは到底考えられない、とされている。ちなみに
後者的発行年は一六六五年だが、出版の允许はすでに一六六四年一月十四日に受けており、同年十月七日に印刷を完了している。

現代に入っても、このオランダ版出版に、ラ・ロシュフォーが介在したか、否かをめぐっては両論があって、結着

は、イ・ブレアード版の編者、Martin-Chauffier は、著者自身がコピーをオランダの出版者に手渡したのか、否かをめぐっては両論があったが、結着

は、渡されるのを默認したのか、どちらかであろうと推測している。

一方、トリーは、はっきりとラ・ロシュフォーの介入を否定する立場である。彼は、オランダ版にはあまりに

幼稚で明白な誤りが多すぎ、もし著者自身が何らかの形でかかわっていたら、このような悪い版にはならない得なかった

であろう、と推論している。

ところで、ラ・ロシュフォー自身は、一六六五年初版の序文 (A peu presser) に、「著者はこの著作（初版）

を世に出す意図は全くなく、書斎の中で閉じ込んでおくつもりだったが、悪いコピーが流布され、それがしばらく前

オランダまで流れてしまったので、止むなく出版にふみ切ったと言っている。
しかし、著者の初版出版におけるあらためた準備から考えて、初版さえ刊行の意図はなかったとするのは、明らかに錯誤であり、それとは、大貴族、俄文ラ・ロシュフォワの信頼としか言いようがない。

確実に言うことは、これを作機として、ラ・ロシュフォワが『箴言集』初版出版の決意をはっきりと固めたこと、あるいはひそかに懸ぶくみであったオランダ海賊版出版のめぐる謎は、永遠に解けないかも知れないが、いずれにせよこの事件は、初版出版を決意するに至るまで、著者の迷いとためらいが、いかに深く、かつ、長かったかを象徴している。

（未完）
AVIS AU LECTEUR. "Ed. de Truchet, p. 267.

"Hetlande, n'avez oblige un de ses amis de meun donner une petite, guili. dit tite dour, a fait concorme A. Fortesmal..."

Hendrik dans son cabinet il une interruption copie guil en a courir, et guil a passe temps de ouvrir quelque temps en encore..."